

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 18

学校名・団体名	東京大学教育学部附属中等教育学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	当事者と対話し探究するアクセシブルデザイン学習

〈活動・研究の意義および活動報告〉

【活動に至る経緯】

本校の第3学年と第4学年を対象とした総合学習は課題別学習と呼ばれる。生徒が興味のある講座を選び、異学年で教科・領域を越えて共に学ぶ機会である。課題別学習「アクセシブル・デザインを探そう」は、アクセシブル・デザイン（共用品）の定義を理解し、共生社会の理念について理解を深めた上で自分なりの問題意識を持つことを学習のねらいとしている。

近年では関連法規の整備により建築物のバリアフリー化が進み、「バリアフリー」という言葉を知らない人はいない。バリアフリーは主に物理的障壁を指す言葉として一般的に認知され、日常生活を送る上で「当たり前にあるもの」として受け止められている。しかし、このことにより、既成のものにまだまだ残る使いにくさや解消されない差別意識については、法整備が整う以前と比してむしろ顕在化しにくくなった印象がある。平成18(2006)年のバリアフリー新法施行後の日本社会に生まれ育った児童生徒にとって、バリアフリー設備はことさら意識化されず「そこにあるのが当たり前」であることから、利用対象や設置目的についてよく理解できていない者もいると思われる。こうした状況を鑑みて今年度は車椅子を使用している当事者の卒業生に話を聞き、生徒に自分の中の認識を改めて問い直す機会を設けようと考え、年間学習計画を作成し学習を開始した。

上記の経緯で学習を開始したが、本校と近隣の知的障がい特別支援学校とで交流を行うことが急遽決まった。このため年間学習計画を一部修正し、障がいのある同年代の生徒との交流の準備と実行を通して生徒が自らの認識の変化を問い直す機会も学習活動の中に設けることにした。

【活動時期と活動内容】

前期：4月から9月末まで

1. バリアフリー・ユニバーサルデザイン・アクセシブルデザインそれぞれの定義を確認し身近な共用品を知る。
2. 校内に問題のある箇所がないか探す。カラーユニバーサルデザインに配慮しポスター制作を行う。
3. トヨタ MEGAWEB を見学し福祉車両とパラスポーツについて学ぶ。ポッチャのルールを理解する。

4. 多様な「移動に困難を抱える人」の視点に立ち、学校と都庁を往復し観察した情報を共有する。
5. 東京ガス新宿ショールームの実施する高齢者体験に参加し、安全に配慮した室内環境や設計について学ぶ。
6. 講師の卒業生による自己紹介。車椅子の構造の違いや車椅子仕様の自動車を運転する様子を見学する。

後期：10月から3月末まで ※本申請による実践

1. 新宿駅を中心に、自分自身で問題意識を持ちフィールドワークを行い、事後に問題点を報告する。
2. 文京区公開シンポジウムに参加し星加良司氏の基調講演を聴き「障害の社会モデル」の理解を深める。
3. 都立知的障がい特別支援学校 高等部との交流会の準備を行い、学校を訪問して交流会を行う。
4. 共用品推進機構を見学し、共用品（アクセシブルデザイン）の理解を深める。
5. 講師の卒業生を複数回招き、講師と生徒とで録画する場面を相談し紹介用の動画を撮影する。
6. 一年間学んできたことを振り返り、発表用のパワーポイントを分担して作成・編集する。
7. 各自で最終レポートと提案を書き、本校公開研究会（2月17日）でポスター展示する。
8. 3・4学年合同で行う課題別学習発表会で車椅子やボッチャを含む展示発表とプレゼンテーションを行う。

【生徒の変容】

今年度の選択生徒の中には見学や体験の記録を文章化するのに時間がかかり、まとまった文章を書くことが難しい者がいた。福祉車両の見学や高齢者体験やフィールドワークを行っているその時には興味を持っていても、思考し続け自分自身の問題意識に結びつける所までは到達しにくい生徒も複数見られた。事後報告会を通して、感想を述べたり問題点を指摘することはできても、自分に関わる問題として考える生徒ばかりとは言えなかった。

こうした状況が前期末まで続き、車椅子使用の卒業生が講師として最初に来校した折も、彼と生徒との間にいくぶん距離が感じられたが、2回目3回目と来校回数を重ねることによって講師と生徒との距離が近づく様子が観察でき、会話の回数も次第に増えた。事故後のリハビリと復学・就職活動と趣味、日常生活上での困難や車椅子仕様の自動車の運転について率直に語る彼に対し、次第に親近感を抱いて接する生徒が増え、良好な関係性が構築された。車椅子の構造や移動時の姿、自動車の構造や乗車・運転する姿を実際に見せてもらうことで、この貴重な情報を他者と共有し伝えたい、という意識が生徒の内面に形成されていく様子がうかがえた。

特別支援学校生徒との交流に関しては、小学校時代に通級指導を受ける児童がいない小学校で過ごした生徒もおり、交流経験がないことで不安を感じながら臨んだ生徒もいた。だが、実際に交流を楽しめたことで認識が変わり、このことを自分自身で意義深いものにとらえている様子がふりかえりの文章からうかがえた。特別支援学校との交流で一緒に楽しむ「すごろくゲーム」の作成時点では、配慮する点をあまりよく理解できない生徒が多かった。だが、実際にゲームを行い、特別支援学校の生徒が質問事項に答える様子を見て、「簡単な質問には答えられるけれど、抽象的な質問には答えられないのだとわかった。」と振り返る生徒もおり、一般的な大人にとっても理解が難しい知的障がいについて、生徒なりに理解を深めていく様子がうかがえた。

【本実践の意義と今後の課題】

本実践によって、障がいのある当事者の日常を知る機会や同年代の特別支援学校生徒との交流体験に、生徒自身が意義を見いだすことを確認した。一方で、「星加良司先生の講演を聴き自分自身の認識が非常に大きく変わった。」と最後に振り返る生徒もおり興味深かった。知識・概念の学習と交流・体験活動とのバランスよい配置こそ、探究的な学びを成立させる要件として重要であることを改めて確認した。今後も可能な限り生徒自身が意義を見出し、「考え続けたいくなる」カリキュラムを設計し障害理解教育に寄与する学習活動を展開したい。